

Editorial

言葉に一度ついて回ったイメージを払拭することは、並大抵のことではできません。一時の流行で瞬間的についたものならまだしも、まるで地層のように長く時間をかけて積み上げられたイメージはどうやったら更新できるのか。そんな地層のなかで、本来の語義からはかけ離れた用法で定着してしまう言葉もあるくらいです。

「免疫療法」と聞いて、なにを想起するでしょうか。少し前であれば、やはり「丸山ワクチン」でしょうか。では、「免疫療法のイメージは？」と聞くとどうか。がんにかかわる医療者であれば、どちらかといえばネガティブなものをもっていった人が多いように思います。実際、ニボルマブの臨床開発の当初の苦労はよく語られています。一方、世間一般では、医療界ほどネガティブなものではなかったかもしれません。むしろ、そう悪くないイメージが強かったのではないのでしょうか。体によさそう、優しそう。なにより「自分の免疫の力で治す」という触れ込みが最高です。誰の力も借りずに、自分本来の力でなんとかする。病から立ち直る、回復するというイメージに合致する神話的なものを感じさせます。しかし、そのイメージを支えるものは「誰かの体験談」であり、科学的な裏付けはないままで、「免疫療法」はなにか怪しげな鈍い光を放つものでした。

ニボルマブに代表される新しい「免疫療法」は、そんなイメージを一新したように思います。未だ「免疫療法」がまことしやかに語られていた頃には、決して出てこなかった副作用のデータ、症例報告、著効例……。これらの数値やデータが積み上げられ、免疫療法が「ただの薬」として私たちの前にその姿を現し始めました。

そして、2016年。バラク・オバマは「Moon Shot 2020」を宣言しました。2013年に翻訳版が刊行された腫瘍内科医であるシッダルータ・ムカジーによる『病の皇帝「がん」に挑む』（早川書房）では、1969年12月9日のニューヨーク・タイムズに掲載された広告「ニクソンへの手紙」の衝撃が語られています。いわく、「あの広告は、がんに対するに人類の十字路(クロスロード)になった」。広告には、次のような一文があったそうです。「我々に欠けているのは月へ到達しようとする強い意志の力と資金と包括的な計画だ」と。しかし、当時のこのがん克服を試みた国家的プロジェクトは、よく知られてい

るように失敗し、アメリカは一度引き下がるほかありませんでした。月に到達することはできなかったのです。

今回、免疫チェックポイント阻害薬の登場によってよみがえったこの言葉、「Moon Shot」。この新しい月到達計画は成功するのか？ 現時点ではアメリカは本気のようにです。日本は、幸運なことに世界でも先駆けて実臨床での使用が進んでいます。がんの治療を一変させるかもしれない治療法(薬)が、日常臨床に入り込んでいます。アメリカのように国家としてではないですが、患者も医療者もそれぞれ個人でクロスロードの真ただ中に立っています。だが、どちらに進めばいいのか？ そのための地図を用意しなくては、という思いから本号の企画が生まれました。

本誌FeatureTopicの論考で言及されているように、実用化された免疫チェックポイント阻害薬が呼び水となって、より新たな免疫療法の開発も進みそうです。進行中の臨床試験は併用療法を実現し、より効果の高いルートや使用法を臨床に還元していくことでしょう。どうやら、この明るい光の差すほうへ進むのは悪くなさそうですが、一方にはコストなど見過ごせない影の問題も依然としてあり続けます。

しかし、ただの隠喩でしかありませんが……。今度の免疫療法の光を当てれば影が生まれる。つまり、実体があります。この姿を見定めるために、まずは地図を片手に世界を眺めてみることから、第一歩は始まるはずです。

本号をもって、弊誌は無事1周年を迎えることができました。編集室一同、まずは厚く御礼申し上げます。ともあれ、年3冊刊行というゆっくりとした歩みなので、まだ4冊しかありません。2017年もこれまで以上の誌面と内容、創刊以来の目標である「新しいクオリティーペーパー」を目指してまい進するのみです。

そして、本誌連載から初めての書籍が刊行しました。好評連載の國頭英夫先生による『死にゆく患者と、どう話すか』。ぜひご一読ください。

「Cancer Board Square」編集室 三橋